小特集・古代文学研究の現状と展望

古事記研究史と「も」の発見

呉　哲男

亀井孝は高名な論文「古事記はよめるか」の中で、「古事記が、後世の学者によって、すべてにわたってかなづけをほどこされるなどといふことの、ヤスマロにとって想像も及ばぬところだったことは、いふまでもない」と断定している。この発言は本居宣長『古訓古事記』を念頭に置いたものであるが、この指摘のはらむ射程距離には深いものがある。実際の例に即してみてみよう。たとえば、『古事記』下巻、仁徳天皇条の女鳥王と速総別王の反逆の物語の部分である。この反乱は将軍大盾連によって鎮圧される。ところが、その際大盾連は女鳥王の手に巻かれていた腕飾りを奪い取り、それを自分の妻に与えてしまう。後日、酒宴の席でそのことを知った皇后石之日売命は、大盾連の臣下としての道に反する行為を断罪して、次のように言う。

夫之奴乎、所纏己君之御手玉釧、於膚熅剝持来、即与己妻、乃給死刑也。

このうち、「於膚熅」の一文を宣長は「ハダモアタタケキニ」と訓むべしとして、助詞「も」を添えた理由について述べる。

さて波陀母と、母てふ辞を添えて訓めるは、事を緩やかに云なり。弑せりて、未だ膚も冷めざるほどに、いたはりもなく、剝ぎ取れるしわざの、情けなくむくつけきことを詔ふなり。（『古事記伝』三十七之巻）

周知のように、『古事記』の語りにはサホビコ・サホビメの反乱説話に代表されるような滅びゆく敗者への限りない共感の物語がある。『古事記』テキストは、女鳥王と速総別王の反逆の物語にもそれに準じる位置を与えていると言ってよい。だが、それとは別次元の訓読の問題として、「於膚熅」を「ハダモアタタケキニ」というように「も」を訓み添える表記上の根拠があるわけではない。宣長は前後の文脈から判断して、死んで間もない女鳥王の身体から腕飾りを奪い取る大盾連の残忍さを強調するために、『古事記』本文にはない感動・詠嘆の「も」を発見して訓み添え、そこにさらなる共感の共同性を期待したのだ。

ところで、時枝誠記は『国語学原論』の中で、言語の存在条件として「場面」をあげ、場所の概念が単に空間的位置的なものであるのに対して、場面は同時にその場の態度、気分、感情を含み、「詞」と「辞」からなる日本語文は、後者の「辞」（態度、気分、感情）によって統合されていると述べている。

宣長の『古事記』本文にはない「も」の発見は、この時枝理論に符合するものがある。言い換えれば、『古事記』の「すべてにわたってかなづけをほどこす」『古訓古事記』の意義はここにある。すなわち、漢意（からごころ）たる漢字・漢文によって汚染された言葉を超克するものこそ、それ自体では意味のない「辞」（態

度、気分、感情＝もののあはれ）であるというわけである。問題であるのは、その後、現代にいたるすべての『古事記』注釈書がこの宣長の訓みを無自覚に踏襲しているということだ。

なお、詳細については呉哲男「文字の衝撃」（『書くことの文学』所収）で論じた。

小特集・古代文学研究の現状と展望

景と心——古代歌謡研究展望——

佐藤和喜

古代和歌・古代歌謡の景の表現と心の表現について、野田浩子は、景は神の心の表れであり、表現される心はその景によって生成するものであると説き（『万葉集の叙景と自然』一九九五）、猪股ときわは歌の心は外から憑いてくるものとして神の側のものであると説いている（『古代文学』26　一九八七・三）。一方、森朝男は、景の表現と心の表現との関係は「〈つなぎ〉の関係にあるのではなく、〈重ね〉の関係にあ」り、両者の関係の由来は「二人以上ないしは二群以上の歌い手の混成的な歌い重ねにあった」と論じている（『古代和歌の成立』一九九三）。こうした野田・猪股と森の見解を総合すれば、景の表現は神の世界を眼差す人の立場の表現であり、心の表現は神の世界に転位した神の立場の表現ということになろう（拙稿・『国語と国文学』一九九五・五）が、近藤信義はこれを音喩論の立場から検証して、転位には音が関っており、景が放出する音が歌い手を憑依状態へとリードしてゆくことを論じている（『音喩論』一九九七）。この近藤の考え方は記紀歌謡、とりわけ記歌謡を捉える上で重要である。例えば、女鳥王の記68「雲雀は　天に翔る　高行くや　速総別　鷦鷯取らさね」は、雲雀の雄と雌、神のヲトコとヲンナの関係を表す景を外部から眼差す歌い手が、その景に響く雲雀の頻りなる声に巻き込まれて神の側に転位し、神のヲンナとなってヲトコへの激情を表すという形になっている。また、宇治稚郎子が大山守を水死せしめた時に歌った記51「aちはや人　宇治の渡りに　渡り瀬に　立てる　梓弓まゆみ　bい伐らむと　心は思へど…い伐らずそ来る　a′梓弓まゆみ」について、a・a′の「梓弓まゆみ」を死者大山守とする通説では物語に矛盾することから、最近、居駒永幸が、a・a′は神樹の下での男女の出逢いという表現様式を踏まえて大山守とその妻のゆかりの木である「檀」を表し、bはその「檀」を伐らないということで大山守を鎮魂しているのだと述べている（『日本文学』二〇〇〇・六）が、この居駒説は従来の説と同様、記51に響いている声を無視している。記51は大山守を騙し討ちにした宇治稚郎子の歌であり、そこには宇治稚郎子とその兵の敵意と嘲笑の声が響いているのであり、したがって、bの心の表現は大山守を嘲笑うものでなければならな